



No.1 2022.4.7

【一年間保存版】

僕は軽井沢に引っ越して今年で15年になります。最近地元でのNPO活動をしている中で移住歴の話になると「15年ですか、すごいですね、ベテラン移住者ですね。引き換え、ここ2-3年で引っ越してきた人たちは、〇〇〇」みたいな、とても意味のないマウンティング会話に巻き込まれることが多々あります。僕みたいに引っ越して15年もたつと、もうフラットな目で軽井沢のことを見られないので、これからの町づくりの為には引っ越してきたばかりの人たちのご意見が重要なのに、なんてことをいつも思ってしまう。(あ、あと、15年もいるのに未だ「移住者」と呼ばれる違和感も感じています。何年たったら地元民になれるんだろう、みたいな。)

そんな話は良いとして、マクロ的な視点で見ると、日本は応仁の乱以来初めて、大都市部から田舎に人口が移動しているそうです。なぜでしょうか？コロナはキッカケにはなりましたが、理由にはなっていないと僕は感じています。「そもそも日本人がそう望みは始めているから」だと感じています。

では、日本人は今なぜ地方への移住を望むのでしょうか。僕としては、それにはいくつかの理由があると考えられます。

まず一つ目に考えられるのは「余白」への渴望です。

日本の伝統的な文化では、「余白」「間」がとても重要視されます。日本庭園の「余白」、能の「間」。日本絵画はフォーカスを置かず、絵画の解釈を観る側に委ねます。

東京に代表される大都市には、この「余白」や「間」が無くなってしまっており、日本人のDNAが悲鳴をあげているのではないかと考えます。大きなビル群や、一寸の隙間もない商店街、延々とつづく住宅街では、そんな「余白」は経済合理性から許されません。また、分刻みのスケジュール、毎日の放課後の習い事、受験戦争、そんな生活では「間」を大切にすることはできなくなっているのではないかと思います。

そして、二つ目に考えられるのは「成長」の概念の違和感です。

日本人に宿されている美的感覚では、「うつろうこと」に美を見出し、「かたち」よりもそこに漂う空気を大切にします。自然に支配されるよりも、自然と共生することに重きをおきます。しかしながら大都市では、「うつろうこと」を感じる事がとても困難です。それを感じる時間もなく、「成長」「拡大」「競争」に晒され、直線的に伸びることが唯一善だと信じ込まれます。

日本人が本来大切にしてきたのは循環型の生活です。1日では日が昇り日が沈む、1年では春夏秋冬が訪れる。地域社会では、自分と家族・親戚・隣近所の廻り合わせで関係性が育まれる。そんな循環の中で、人々は地に足をつけながら成長をすることで、日本人は育ってきたのだと思います。

直線型成長の先に夢の世界は待っていないことに気づき、循環型成長にこそ人間の喜びを感じることができる。そんな原点回帰をし始めたのではないかと考えています。

最後の三つ目に考えられるのは「文化」形成を担いたいと思い始めたことかなと考えます。

僕が働いているビームスは、「日本のファッション文化」を作ってきたと言われることがよくあります。誇らしいことではありますが、その文化を作ってきた歴史は、非効率的で、再現が不可能で、合理的な意思決定で行われてきたものではありません。一方で、合理的で、再現が可能で、効率的なことは文化とは言わず、トレンドとかブームとかと言われます。

文化を作ってきた頃のビームスは、小さな組織で、それぞれ家族のように支え合っていました。担当者が変わっても、上司が変わっても、常に「ビームスらしさ」という禅問答を繰り返し、小さなコミュニティの中で継続的にビームスを追求してきました、たとえ赤字でも。ビームスにはそれが継続できる関係性の基盤があったから、ファッション文化を作ることができたのだと思っています。

しかしながら、現在、東京で大きな組織で、関係性の薄いコミュニティに属している中では、売上や流行は作れても文化は作れません。物事の本質を追求しようと思うと、大きさが邪魔になってしまう。そんなことを感じている人たちが、小さなコミュニティに所属して、循環的成長の中で「文化」を作る担い手になりたいと考え始めているのではないのでしょうか。

ぴっぴには、そんな「余白」も「間」もたっぷりあります。「循環的成長」こそが重要だと考えています。そして、ぴっぴという素晴らしい「文化」作りの担い手にもなることができます。新入園のみなさま、そんなぴっぴによろこそいらっしやいました。そして、まつぼっくり、くり、おおくりのみなさま、新しい仲間と一緒にめいっばい楽しんでください。

今年一年、よろしく願いいたします。

山崎 元

# 木のいきもの子育てはなし

# 4月

みなさん、こんにちは。おくり(びっくり!)のあぐずるの母の菜々恵です。森や野原のガイドの仕事をしている関係で、びりびりみなさんに森のあれこれおもしろいこと楽しいことおいしいこと♪をお伝えする役割をいただいています。今年度は、森の中でおきている小さないきものたちの

～シジュウカラ 今月は  
の子育て～  
森で一番よくみかける小鳥です。



メスが巣をつくらり  
卵をあてにめる間  
オスは巣の近くで  
(ほかのオスが近づかぬ  
よう) さえずっています。

ガンバ〜!

♪ ツツピー

クチャリ  
キンシー!

オスは胸の  
ネクタイが  
太い♪

子育てのお話を鳥、虫、植物など色々季節に  
合わせてお送りしていきたいと思っています。

日々、子育てをしている私たち、森の生きもの  
たちの子育ての様子を知り、へえ〜と感じたり  
おんじだ! と共感したりして、少しでも森の生きもの  
たちの存在を近くに感じていただけたら嬉しいです。  
そしてまた、みなさんの子育てのイロがよきものと  
なればら♪ 1年間よろしくお厚いいたします。

阿部菜々恵

ヒナがかえったら夫婦共同でヒナたちに  
エサやりです。成長具合にもよりますが、  
最大時は1日300匹!!のイモムシを

食べることも! 巣をみていると雄も雌もいっせいに  
きたり泣いたり。この頃は森の科が芽吹き、命  
たくさん産まれる時。その豊かさは羨みがあって  
こそ、ヒナたちも成長していくのですね。



未も今、まさに娘にゴミ箱をあけるとき、  
こんな感じですか...? みなさんも??  
親にらばいい自分のゴミ箱を  
たべているのでしょ〜?

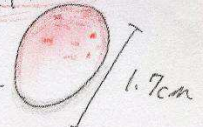
時々たらあがってして  
卵の位置や向きをかえ  
まんべんなくあてにめられるように  
しています。

クチャリヨウニ  
キョウキョウ!



メス  
は細い

卵は7~10個ほど作り、  
産後2~3日が12~14日  
前後に産む



「産後」といって卵を産む  
場所には重た物の毛、シダの葉  
鳥の羽などやわらかいもの  
を使うスペシャルベット!

ふわふわのク  
ギヤと5cmくらいの厚さで  
しごめる

巣づくりは  
メスがします。



ソツモ  
セイケツニ〜♪

えさを運んだあと、親鳥は  
巣から、ヒナたちのフンを運んでいきます

巣をよごさないよう、またほかの動物に  
気づかれないように、小鳥のフンはセ「ラチン」袋の  
袋に包まれています。

# たんたん はたは

花≡心≡芽≡太陽≡月≡星≡食≡寝≡芽≡花≡卵≡顔

たんぼと畑たより

ひとつ学年が大きくなったみなさんと出会う  
新年度… 田畑のシーズンも到来です！

“わたしたちは 食べたものでできている”を  
考えながら。

ぴっぴの森と同じように、たんぼや畑でも、  
子どもたちと、保護者のみなさんと、  
手作業しながら、おしゃべりしながら、遊びながら、  
植物、作物と角虫れ合っていたら  
嬉しいなあと思っています。

そのときどきで、おたより、黒板などで  
お知らせします。

どうぞ よろしくお願ひいたします！

はるこ